



シンポジウム「女性研究者支援 - 次のステップにむけて -」

女性研究者支援センターは、2006年9月より科学技術振興調整費により事業を展開してきましたが、この3月で調整費の支給は終了し、来年度から学内経費で運営することになりました。これを機に、広い視野に立った女性研究者支援の次のステップを、学内外のみなさまと一緒に考えるシンポジウムを開催いたします。お忙しい時期ですが、是非ご参加くださるようお願い申し上げます。

日時 2月27日(金) 13:30～17:00

場所 京大会館210号室

第1部 講演会

板東 久美子(内閣府男女共同参画局・局長)「大学における男女共同参画一次のステップにむけて」
黒田 光太郎(名古屋大学工学研究科・教授)「女性研究者支援ってなんだろうー理系男性教員が考えてみたー」
落合 恵美子(京都大学文学研究科・教授、g-COE「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」拠点リーダー)
「"女であること"はマイナスではない」

第2部 パネル討論会

基調報告 「子育てバトルの合間の研究生生活」

御手洗 容子(物質・材料研究機構材料ラボ白金族金属研究グループリーダー、人材開発室男女共同参画チーム長)

パネル討論「次世代女性研究者との対話」

コーディネーター：鈴木 晶子(京都大学教育学研究科・教授、女性研究者支援センター地域連携WG主査)

パネリスト：上記講演者の他

久家 慶子(京都大学理学研究科・准教授)

大越 香江(京都大学医学部附属病院消化管外科・医師)

三浦 美樹子(京都大学ウイルス研究所・研究員)

鮫島 輝美(京大学生パパ・学生ママサークルめんどり学部代表、人間・環境学研究科博士後期課程1年)

今田 絵里香(g-COE助教)

参加ご希望の方は、2月24日までにお申込みください。

懇親会・保育室の申込は、2月20日までをお願いします。

京都大学優秀女性研究者賞 「たちばな賞」受賞者決定

今年度より創設された京都大学優秀女性研究者賞「たちばな賞」には、研究者部門12名、学生部門9名の応募があり、選考の結果、各部門1名ずつの受賞者が決定しました。この表彰式と受賞者による研究発表を下記のように行います。是非、ご出席ください。

<受賞者>

学生部門 本城 咲季子(生命科学研究科博士課程)

研究者部門 延與 佳子(基礎物理学研究所准教授)

<表彰式・受賞者による研究発表>

日時：2009年3月3日(火) 12:50～14:25

場所：芝蘭会館 稲盛ホール

プログラム

12:50 開会の挨拶 藤井 信孝(理事・副学長)

13:00 表彰式

13:15 研究発表1 本城 咲季子

「食餌制限による寿命延長の分子機構」

13:45 研究発表2 延與 佳子

「ミクロな世界の不思議な現象

ー原子核に見られるクラスター構造ー」

14:15 閉会の挨拶 大西 珠枝(理事・副学長)

※表彰式では、松本 紘・京都大学総長より表彰状と記念楯が授与されます。

感染性疾患の子ども 隔離保育室設置についての アンケート調査へのご協力を！

女性研究者支援センターでは医学部附属病院に病児保育室を開室しています。しかし、これまでは保育室内の伝染予防の目的で、強い伝染性を示す疾患の子どもは受け入れていませんでした。今後このような子どもの受け入れを可能にするために、隔離保育室の設置を検討しています。そのため、常勤、非常勤を問わず、すべての男女教職員・学生・研究員(学振の特別研究員の方も含みます)等の方を対象に、隔離室が必要かどうかの考えを伺いたく、webによるアンケート調査を実施いたします。アンケート結果は、大学への要望を行う際に資料として使わせていただきますので、是非ご協力下さい。

以下のHPに入って回答して下さい。

京都大学女性研究者支援センター

検索

<http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>

【締切】 3月19日(木)

第6回「性差の科学」研究会

「女性の生涯の性と健康」

大川玲子・千葉医療センター産科医長

今日は、女性の生涯の性と健康について、生殖機能、性腺機能から考えていきたいと思います。初潮（平均12才）の少し前から20歳ぐらいまでが思春期、性の発達期です。性成熟期には妊娠・出産・育児などがあり、性行動も最もアクティブな時期です。やがて更年期を経て老年期となります。女性は月経で示されるような性周期（サイクル）があることが特徴です。月経は間脳、下垂体と卵巣がホルモンをコントロールして起こります。月経異常には、先天的なもの、身体機能の未発達によるもの、心因的なものなどがありますが、女性にとって月経は健康のバロメーターでもあります。



最近、子宮内膜症や卵巣がんが増えていますが、これは出産が減って、女の人が一生のうちに体験する月経の回数が増えたことに関連があると考えられています。排卵は、卵巣の皮膜が破れて卵が飛び出すので卵巣が傷つきます。傷の修復が度重なり、卵巣がんの発生の素地になると言われています。また、月経は子宮内膜が脱落して腔から出て行くものですが、子宮経管の圧は比較的高いので、卵管を通じて月経血が腹腔の方に逆流することがあります。それが腹膜に着床して異所性の子宮内膜が発生（子宮内膜症）、その場で月経のように出血を繰り返して、月経痛やまわりの臓器との癒着をおこします。

平成20年12月10日（水） 17:00～19:00

女性が妊娠・出産をコントロールすることは必要なことですが、子どもを産まないと、こういう弊害もあるのです。避妊用の低用量のピルの使用は、この対策としても理に叶っています。ピルは排卵を抑えるので、人工的ですが妊娠出産を繰り返した昔の人のように排卵の回数を少なくできます。

生殖を中心とした性の健康の観点からは、望まない妊娠と性感染症のリスク回避が課題になります。各種避妊法のうちで、確実性の高いのは低用量ピル（OC）と子宮内避妊器具（IUD）です。OCは合成のステロイドホルモンで、その内容は女性ホルモン（エストロゲン）エチニール・エストラジオール1種類と黄体ホルモン3種類です。OCにも静脈血栓症の副作用がありますが、安全性は高く、月経痛の緩和や、前述のように子宮内膜症の予防、卵巣がんや子宮内膜がん、骨粗鬆リスクを下げるという副効用に注目すべきでしょう。

更年期は閉経を中心とした1、2年の時期をいいます。閉経時期の個人差は大きいですが、平均的年齢は50歳です。エストロゲンの低下、脳下垂体のFSH（卵巣刺激ホルモン）の上昇で、閉経と診断をします。閉経前後に自律神経失調症状や不定愁訴を起こすのが更年期障害です。更年期障害は、ホルモン環境の急変が一番大きな理由ですが、環境因子、性格因子も関係があるので、ホルモン療法だけでなくカウンセリング、漢方薬なども治療に使われます。エストロゲンの投与は原因療法とも言え有効ですが、子宮体がんの発症リスクを高めるので、子宮がある女性では黄体ホルモンの併用が必要です。閉経後30年生きる現代の女性にとって、健康は大切なことなのです。

出前講義 京都府立東陵高校にて

文学研究科・教授 伊藤公雄

平成20年11月28日（金）

11月28日（金）午後に、京都府立東陵高等学校で、「男女の人間関係を考える」と題した講演を、女性研究支援センターの出前講座という形で実施しました。

対象は、卒業を前にした高校3年生全員ということで、人権講演会の一環として計画されたものでした。講演用のチラシによれば「社会に出る時期を前に、性差別の実例をもとに男女の人間関係を考える機会を作り、男女共同参画の理解を深めるとともに、自己の意欲や能力を活かした進路選択の一助とする」というのが講演の趣旨だそうです。

事前の打ち合せでは、「性差別の問題、男女共同参画の意味とともに、デートDVについても話してほしい」ということでした。配偶者暴力防止法（DV防止法）はすでに施行されているのですが、これは配偶者間（現在は離婚後の場合も適用）を対象にしたものであり、高校生や大学生などのいわゆる恋人間の暴力については対応できない状況にあります。ところが、実態は、こうした若い結婚前のカップル間の暴力も顕在化してきているのが実情です（2007年には、内閣府が首都圏の大学生や大学院生による若者の調査プロジェクトを組織し、調査を実施しています。ばくも、調査成果の発表会にコメンテーター役で参加しました）。「京都府の高校教師の研

修で、デートDVという言葉をはじめて知りました、ぜひこの問題についてもふれてください」というのが、先生たちの希望だということでした。

90分ほどの講演会でしたが、「できるだけわかりやすく」という依頼もあり、最初はいくつかクイズめいたものをはさみつつ、講演を進めました。「コロンブスの新大陸発見は何年」（もちろん、コロンブスは、新大陸を「発見」していません。彼は、すでに先住民が住んでいた土地に1492年に「到着」はしていますが、この質問は、後で聞いたら、先生たちの間で「なるほど」という声があったそうです）とか、ちょっとしたひっかけ問題も含みつつ、オバマ大統領の登場やヒラリー・クリントン候補の活躍などにふれながら、人権問題の本格的な登壇が、実は、ほんの40年ほど前のことだったということなどについても話をさせていただきました。

国際社会からみた日本の現状や、今後の少子高齢社会にとって男女共同参画がいかに必要かという話をした上で、デートDVについて、できるだけ具体的に話をしました。生徒たちも、おしゃべりもせず（先生たちは事前はかなり危惧されていましたが）、熱心に聞いてもらったという印象でした。



2009 年 4 月開講のポケゼミと全学共通科目

2009 年度 4 月より、学生の皆さんに、ジェンダーについて自然科学と人文・社会科学の両面から考える機会を授業で提供します。ポケットゼミ「ジェンダーと科学」は新入生のみを対象とし、理系・文系の先生との議論に重点を置いたゼミです。全学共通科目の「ジェンダー論入門Ⅰ、Ⅱ」は、ジェンダーについてもう少し深く掘り下げた講義です。Ⅰはオムニバス形式による自然科学的な面からみた性について、Ⅱは伊藤公雄先生による人文・社会科学の面からジェンダー論入門です。

ポケットゼミ「ジェンダーと科学」の講師と課題 (火曜日 16 時 30 分～18 時、女性研究者支援センター 2 階会議室)

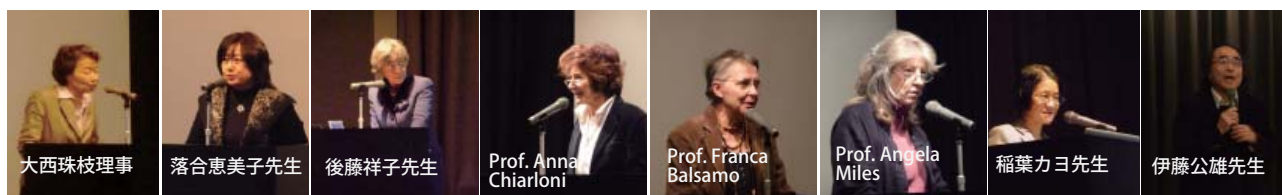
第 1 回	4 月 21 日	伊藤 公雄 (文学研究科)	本ポケゼミの目的、ジェンダー研究の歴史とその意義について
第 2 回	4 月 28 日	塩田 浩平 (理事・副学長)	性の決定メカニズムについて
第 3 回	5 月 12 日	野口 順子 (理学研究科)	植物における性
第 4 回	5 月 19 日	山極 寿一 (理学研究科)	霊長類の性差と行動について
第 5 回	5 月 26 日	吉川 左紀子 (こころの未来研究センター)	性差を見る視点
第 6 回	6 月 2 日	田中 雅一 (人文科学研究所)	ジェンダーと宗教
第 7 回	6 月 9 日	落合 恵美子 (文学研究科)	家族関係とジェンダーについて
第 8 回	6 月 16 日	押川 文子 (地域研究統合情報センター)	アジア社会の男女共同参画の状況について
第 9 回	6 月 23 日	山田 文 (法学研究科)	ジェンダーと法
第 10 回	6 月 30 日	鈴木 晶子 (教育学研究科)	ジェンダーと文化
第 11 回	7 月 7 日	竹沢 泰子 (人文科学研究所)	人種とジェンダーのアナロジー
第 12 回	7 月 14 日	伊藤 公雄 (文学研究科)	男女共同参画に関する社会の動きについて



全学共通科目「ジェンダー論入門Ⅰ」の講師と課題 (火曜日 14 時 45 分～16 時 15 分、吉田南 1 号館 1 共 0 1)

第 1 回	4 月 14 日	塩田 浩平 (理事・副学長)	生物学的性差決定のメカニズム
第 2 回	4 月 21 日	今村 拓也 (理学研究科)	脳の性分化
第 3 回	4 月 28 日	渡邊 大 (生命科学研究科)	birdsong、音声コミュニケーションにおける性分化
第 4 回	5 月 12 日	篠原 隆司 (医学研究科)	発生工学の歴史と精子幹細胞の可能性
第 5 回	5 月 19 日	森 哲 (理学研究科)	動物の行動：性淘汰と性的二型
第 6 回	5 月 26 日	疋田 努 (理学研究科)	爬虫類の性と繁殖
第 7 回	6 月 2 日	幸島 司郎 (野生動物研究センター)	動物行動学から見た性一遺伝か学習か？
第 8 回	6 月 9 日	野口 順子 (理学研究科)	植物と性
第 9 回	6 月 16 日	清水 章 (医学部附属病院・探索医療センター)	免疫反応、免疫疾患から見た性差
第 10 回	6 月 23 日	小西 郁生 (医学研究科)	子宮癌からヒトの性の進化を探る
第 11 回	6 月 30 日	木原 雅子 (医学研究科)	AIDS と社会 「Sex in Japan」 調査の結果より
第 12 回	7 月 7 日	林 晶子 (医学研究科)	女性に多い摂食障害について医学的、医療人類学的視点から
第 13 回	7 月 14 日	若月 芳雄 (医学研究科)	加齢と性差

国際シンポジウム『女性研究者が創り出す研究・教育の未来に向けて』



12 月 15 日 (月) に芝蘭会館稲盛ホールにて国際シンポジウムを開催しました。後藤祥子先生 (日本女子大学長) の講演の後、Prof. Anna Chiarloni (The University of Torino)、Prof. Franca Balsamo (The University of Torino)、Prof. Angela Miles (University of Toronto) の 3 人が、諸外国の女性研究者事情の報告を行いました。また、稲葉カヨ・センター長は女性研究者支援センターの京都大学における役割についての報告を行いました。最後に、参加者からの質問を受けて全体討論を行いました。

■ お知ろせ 保育室体験会

日時 3 月 4 日 (水) 18:15～19:45
 内容 センター保育室でお弁当を食べ、シッターと遊ぶ
 申込 2 月 24 日までに「おむかえ保育」事前登録をして、
 申込んでください。(親子参加です)
 ※お弁当代は実費 (大人 600 円、子ども 450 円) をお
 支払ください。アレルギーのある方は、ご持参ください。

病児保育相談室を開室

病児保育室の小児科医と看護師が、こどもの健康に関
 する相談をお受けします。お気軽にご利用ください。
 日時 毎月第一水曜日 昼休み (12 時から 13 時)
 場所 京都大学附属病院 小児科外来診察室
 対象 病児保育室の利用登録をされている方
 予約 電話 075-751-3090 で事前予約をしてください。

連載：研究者になる！－第16回－

工学研究科・助教

有吉眞理子



私の研究分野は、分子生物学の一分野である構造生物学、すなわち、生体内にあるタンパク質や核酸の立体構造を解明し、それに基づいて生命現象を理解しようとする研究領域である。X線結晶解析法を用いて、タンパク質や核酸の立体構造を決定することが、私の研究の第一ステップである。これまでの研究生活を振り返ってみると、最初に結晶構造解析がうまくいったときの体験と様々な魅力的な研究者との出会いがあって現在の研究者としての私があると思う。

私の場合、初めて取り組んだ研究テーマで、実験とデーター解析を繰り返す試行錯誤の数年間の後、X線によって結晶中に埋まっているタンパク質分子の形が浮かび上がってきた瞬間の達成感と表現しがたい喜びに味をしめ、研究を続けていたら「研究者になっていた」というのが実状である。先日、研究室のメンバーとの宴会の席で、研究の面白さは、推理小説を読む楽しみに似ているという話がでた。私は、よく気分転換に国内外の推理小説を読むが、そうかもしれないと思った。自分自身が行った実験データーを一つのパズルのピースだとすると、研究は、他の実験データーとの整合性を考えつつ、見つけたパズルのピースを正しい位置に置いていくという作業の繰り返しである。パズルがここだということにぴたりとはまると気持ちが良い。どんなに小さいパズルのピースだったとしても、それが思いがけないところにピースがおさまって、予想と違う展開が見えてきたりすると爽快である。それは、良質の本格推理小説を読み終わって感じる知的刺激による楽しさに似ている。私が初めて結晶構造解析を行った1994年当時と比べると、現在、生体分子のX線結晶解析のプロセスはマニュアル化され、自らの頭を悩ませて解析を進める機会が減っているようにも感じられる。しかし、研究室の中で、初めて結晶を得てやる気になった学生の表情や解析したタンパク質の構造から次の実験を思いついたという学生の前向きな言葉を聞くと、私が最初に出会った研究の面白さを彼らも同じように体験しているのだろうと感じる。

最初の研究テーマに取り組んでいた頃の私は、毎日の実験がうまくいったり、失敗したり、目の前の結果に一喜一憂することが多かった。研究生生活を重ねるにつれ、自分の実験データーというパズルのピースが生命現象を説明する上でどの部分におさまるのか、いったい最も重

要なピースは何なのか、もう少し高い視点に立って考えるようになり、更に研究の楽しみが深くなっていく気がする。同時に、研究の難しさも痛感することになるのであるが。私自身の経験では、学術論文や学位論文を完成するという過程でこのような研究の面白さを実感したという気がする。第三者に対して、自分の実験結果から得られた新しい知見や仮説を証明、説明し、正当に評価してもらう。そのために、自分自身の実験結果を客観的に分析、評価し、生命科学という枠組みの中での位置づけを判断する必要がある。最初に書いた学術論文は、もちろん、恩師の修正、加筆、私が書いた文章は却下され、叱責されつつ完成した。苦勞して手にしたデーターは、ついつい過大評価しがちで、矛盾点を指摘されると自分自身の一部が否定されたようで冷静に批判を受け入れられないこともあった。私にとって、論文を書くという作業が、研究という枠を超えて、自分自身を客観的に見つめるための最良のトレーニングであったと思う。もちろん、これについては、今も修行の途中である。

最後に、研究を通して出会った人たちから多くのことを学んだということを付け加えたい。特に英国でのポストドク時代には、様々な国籍の同年代の女性研究者、チームリーダーとして活躍する女性研究者と知り合う機会を得た。英国、欧州でも出産や子育てと研究の両立に悩み、実力を十分に発揮できずにチームリーダーへの道を断念する女性研究者も少なくはない。私の友人の中にもパートナーの理解とサポートを得て、子育てと研究を両立している人もいれば、今は子育てを優先して数年後研究に戻りたいという人もいた。そこには様々な思いや葛藤があるのだろうが、研究と自分の人生に真摯に対峙して、自ら下した決断に言い訳をしないという点で、私の目にはどちらも素敵な生き方だと映った。

現在の研究室は男子学生のみで女子学生の本音を直接聞く機会がなくて寂しい感じがしている。結婚、出産、子育てと女性であるが故に感じる将来への不安もあるだろうが、少しでも研究が楽しいと思う瞬間があったら、素直に研究者としての第一歩を踏み出してほしいと思う。そして、その先にあるもっと深い知的好奇心を満たす楽しさを実感してほしいと思う。無計画なのは薦めることはできないが、結局、全く迷いのない、困難にぶつからない人生などないのだから、いつか迷って苦しむのなら、今自分がやりたいと思う道に進むのがベストだと、私はそう思う。



Center for Women Researchers

〒606-8303 京都市左京区吉田橘町
電話 075 (753) 2437
FAX 075 (753) 2436
E-mail w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>